

〈総説〉

ルソーの保育・教育思想をめぐって：序説

野 口 周 一

Rousseau's Philosophy on Childcare and Education: An Introduction

Shuichi NOGUCHI

はじめに

「東京新聞」2019年5月5日付「筆洗」は、「子どもを不幸にする一番確実な方法をフランスの思想家ルソーが説いている。＜それはいつでもなんでも手に入れられるようにしてやることだ＞（『エミール』）物に限らずだろう。わが子の笑顔ばかりみているようなら、幸福は子どもから遠ざかっていく」と筆を起す。次に米国のジョークをあげ、「うるさくしなければ、子どもはだめになり、うるさくすれば、ときに逆効果で…。洋の東西を通じて、加減もタイミングも難しいのがしつけだろう」と問題提起する。

かように、ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712–1778）の『エミール』（EMILE, ou DE L'EDUCATION, 1762）は現代社会でも生きている、といえるだろう。ⁱ

その日本語訳書も初訳ⁱⁱ以来多数存在する。そのひとつに、永杉喜輔、宮本文好、押村^{まもる}襄の三氏による共訳『エミール』（玉川大学出版部、1965年。以下この共訳書を引用するときは「永杉訳」と略称する）があり、翻訳の中心となった永杉喜輔の教育思想は筆者の研究テーマのひとつである。ⁱⁱⁱ その永杉が『エミール』を翻訳し、自らの教育実践の糧にしてきたことは自明のことであるが、その評価については未だなされているとはいえない。^{iv}

本稿は永杉の翻訳姿勢とその読み込み方、あわせてルソーの保育・教育思想に説き及ぶことを目的とする。

1. 問題の所在—永杉喜輔の現代的位置付け

従来、永杉への評価は風聞の類に限定されてきた。かつて、永杉については「過去の人である」とか「その話は『次郎物語』に終始している」と喧伝されたことがある。^v 最近、精神医学者の岡本重慶氏（京都森田療法研究所主宰）は「実は私はこれまで、永杉の評価に困っていたという

か、わかりませんでした。田澤がいて、湖人がいて、永杉は三番手の人みたいで、単なる語り部的な継承者だったのか？永杉の真骨頂は何なのだ、という思いがあった」、「やっとわかりました。この方の人間味ですね。この人自身が人間として人を生かすというか、人を目覚めさせる力を持っていたと思います」、「社会教育は、『社会』とは言いながら『個人』の自己教育への意思、自発性から始まるわけですから、社会を構成する個々人の自発性が大事です。では自発性をどうして出させるかが問題になりますが、やはりこういう人がいるといいんです。永杉は自己教育へ向けての自発性・自主性を目覚めさせる力のある方だったのです」と述べている。^{vi}

永杉は昭和30～40年代のエッセイに、学校に講演に招かれたとき、その演題に「生徒（もしくは児童）の取り扱いについて」、あるいは別の場所で「青少年対策について」と掲げられていることを話題にして、「これは貨物取り扱いのことですか」と主催者に注文を付けていた。^{vii}

筆者はこのような問題意識をもつ識者はいないかと、長い間折に触れて、いろいろな文章を渉猟していた。それに即応する一文に出会ったのである。筆者が永杉に出会って半世紀以上経った現在においてである。

それは「東京新聞」2019年3月24日付、「時代を読む」というコラムを担当した浜矩子氏（同志社大学教授）の「人は材でも財でもない」と題するエッセイである。このエッセイは、「人手。人材。労働力。マンパワー。いずれも、今に始まった表現ではない。以前から存在する言葉である。だが、改めて並べてみるととても気になる」と始まり、「これらの言葉に共通するものは何か。それは、一見して明らかだ。人間を人間扱いしていない。人を道具としてしか見ていない」と続く。その後、人手、人材と言う語句を吟味し、「従業員は素材や資材ではございません。だから、人財と表現することにいたしました。ある時から、こういう書きかたがはやるようになった。貴重な財産です、というわけだ」と記し、「財」という経済用語を分析し「人材を人財と書き換えてみたところで、基本的には、人間を人間扱いしていない。この点に変わりはない」と述べる。^{viii}さらに人的資本、人的資源という表現を挙げ、「どうして、人を人扱いしない用語の地平が広がっていつてしまうのだろう。労働力にいたっては、完全に人間を機械視している。マンパワーもひどい。いかにも、使いつぶしのきく機械を追い求めている感じだ」とする。そして「いつの頃からか、人は人を人扱いしなくなった」として、「この展開の起源は、結局のところ、工場労働の誕生にあるのだろう。人が道具を使うのではなく、機械が人を働かせる。この関係が形成された時、人は人を人扱いしなくなった」と記すのである。

「東京新聞」2019年5月5日付「投書欄」の「ミラー」と称するコラムに、「上野さんの祝意届いて」と題する主婦の方（55）の意見が掲載されている。これは東京大学入学式における上野千鶴子氏の祝辞を話題としたものである。まず東大生が起こした女性凌辱事件から説き起こし、「女性への性差別にも言及したが、世間を見渡せば差別は他にもたくさんある。なぜ私たちは人をカテゴライズ（分類）したがるのだろう。『男性だから』『女性だから』『老人だから』『障害者だから』『同性愛者だから』『外国人だから』等々。それは、自分と違う考えや行動の人を理解で

きないときに行なうのではないか」と述べる。この主婦の方の論旨には賛同するものの、カテゴライズなどと随分と難しい言葉を使うものである。

それはさておき、このカテゴライズについて、永杉は「差について」というエッセイで「人間は差異を好む。自分が人よりすぐれていると思いたいからだ。これはやっかいな習慣である。その習慣を変える習慣をつくらねばならぬ。これがこれからの生涯学習の目的である」と記している。^{ix}

そして、その前段にルソーの『エミール』の一文を引いている。即ち、「人間の教育は生まれると同時に始まるのだ。ものもいわず、聞き分けもないうちから、すでに教育されているのである。学習より経験が先だ。授乳者の顔を見分けるようになったとき、子どもはすでに多くのものを得ているのだ。最も愚かな人の場合でも、その人の生まれたときから成長した現在までの進歩のあとをたどってみたら、その知識の量におどろくだろう。かりに、人間の全知識を二分して、万人共通の分と学者だけに特有の分とにわけたとすると、後者は前者にくらべて、ごく小さなものであろう。ところが、わたしたちは、すべての人が共通に学び取った知識のことは全然考えない。それは知らず知らずのうちに、しかも分別のつく年齢に達するまでに形成されるからであり、また知識というものは差異があってはじめて注意をひくものであるからだ。ちょうど代数の方程式のように、相等しい数量は相殺されてゼロになるのである」と（永杉訳『エミール』44頁）。

以上、永杉の現代的な位置づけを考えるにあたり、二事例を挙げることにより、従来の永杉についての世評を払拭しえたと考える。

2. 永杉の『エミール』への取り組み方

ここでは、まず筆者（野口）と永杉の対談から示していきたい。^x

野口 先生はルソーの『エミール』に随分と心惹かれるところがあって、ついに昭和39年（1964）に翻訳を完成、出版にこぎつけられました。まず、先生がルソーにとりつかれたところからお話してください。

永杉 大学一年の夏休み、昭和6年（1931）のことだった。7月に母校の五高のサッカー部のコーチとして熊本に行き、それがすんで郷里に帰り、『エミール』と『告白』を岩波文庫で読んでことに始まるな。熊本の夏は暑く、しぶうちわで蚊を追いつつ読みふけたなあ。

野口 先生が大学で哲学を専攻されたこととの関わりはいかがでしょうか。

永杉 うん。哲学科へは漠然と入ったんだが、やがて小西重直先生について教育哲学を専攻することに決めただなあ。二年生になって、先生の演習が『エミール』のドイツ語訳を使われることを知り、一年早く参加した。先生はフランス語が不得手でね、ドイツ語訳のところどころにフランス語が出てくると、そのころフランス語の主任だった落合太郎先生に聞かれて訳をつけてくださった。私はこの演習で『エミール』を丹念に読み、日本語訳の『エミール』に意味不明のと

ころがあることに気付き、それで何とか自分でも訳してみたいと思うようになった。

野口 卒論のテーマ「教育とは何か」との関係はどうでしょうか。

永杉 そのころ日本に入って来たドイツの教育科学派の学説を私流に取り入れて、生活と教育との関連について論じたものだった。この「生活と教育」のテーマはルソーを読んで以来、私の頭から離れないものだった。

野口 そうですか。私は先生が生活と教育の関連に注目されたのは、下村湖人の青年団講習所における農村青年との合宿を契機としたものだったと思っていました。

永杉 うん。しかし、ルソーによってその問題に着目していたからこそ、私にとってまさに「教育開眼」という意味をもつにいったんだ。

この「教育開眼」について、永杉は「小金井の青年団講習所（『次郎物語』の「友愛塾」）に入所、所長は当時無名の下村湖人、30数名の小学校出の青年団員たちと合宿6週間、便所掃除からはじめる。この講習は学校教育しか知らなかった私にとって、まさに教育開眼であった。卒論は学校以外の教育力について書いたが、本当は全然わかっていなかったことがこの講習でわかった」と述べるのが通例であった。^{xi} ここで重要なことは、その教育開眼の前提にルソーの存在があったことである。

次に「教育とは言葉ではない」という節での対談を示す。^{xii}

野口 学校教育という生活から遊離した教育よりも、社会教育という生活に密着した教育に先生の心が向いていかれた原点はここにあったんですね。それではルソーの教育論について、そのあたりからお聞きしていきたいと思います。

永杉 ルソーは「学校の生徒たちの場合でも、彼らが校庭でお互いに学び合う授業の方が、教室で教えられる授業よりも百倍も有益なのだ」といっている。教師は授業では生徒の全人格の中で、教室の中だけでつみとられる部分を相手にしているが、校庭では生徒たちは解放されて全身全霊をかたむけて活動できるね。そうしている最中にベルが鳴ると、生徒たちは心ならずも断念して、教室向きの生徒に変身することを身につけるんだ。その躰に従うためには、生徒たちは先生の思惑を読み取る術を心得なければならないな。

野口 そうですね。一般的に生徒は先生を慕って教室に入るのではありませんね。そういうきまりになっているからですね。

永杉 制度という強制のもとで、そう躰られたまでのことなんだ。そうした圧制のもとでは、生徒たちは教室では外で身につけた知恵を発揮することはできない。こうして学校ではやむを得ず、生徒たちは外面と内面と二重の生活をするように強いられ、それが習い性となって、大きくなってそれが当たり前になるんだな。

野口 ここで学校教育の問題点が出てきたわけですね。

永杉 昔、私が師範学校の附属小学校長のときだね、ある附属小学校にドイツ語を解すると称せられた先生がいた。その先生の研究発表を聞いた県の若い学務課長が、彼に惚れ込んでいきなり指導主事にしたんだ。ところが、その先生はドイツ語は一字も知らない。教育学の本の中のカタカナ書きのドイツ語を暗記してきただけの話だ。それを悟られないようにした点がまさにタレントで、指導主事の資格十分というところだな。

野口 恐れいりました。

永杉 私がこんなことを敢えて言うのも、親の教育通念を正してもらいたいからなんだ。

野口 「教育は学校にある」という通念ですね。

永杉 日本人は明治以来その新興宗教にとりつかれているんだが、今なおそれを迷信だと悟らない人々が多いのが歯がゆくてならない。

野口 この本はそのための対談でもあります。

永杉は「教育は学校にある」という通念を正すことを念願としていたことが良くわかる。そして附属小学校という特権的な学校を解体することを主張していたのであるが、本稿ではその詳細は割愛する。

さらに『『自然に帰れ』とは』の項目を掲げる。^{xiii}

野口 そうしますと、ルソーは学校教育に期待をかけてはいなかったということですね。それでは何に期待をかけたんでしょうか。

永杉 学校や書物が人を教育するのではないといって、ルソーはエミールを学校にも行かせず、こどものころは一冊の本も与えていないね。

野口 それは学校教育は言葉の教育であって、それは知識であるかもしれないが知恵ではないということですね。

永杉 そうだ。知恵は家庭教育でしか養われない。なぜなら、自分が経験したことだけが身について知識、すなわち知恵になることができる、というのがルソーの教育観をつらぬいている考えだね。ところで、ルソーはわが子を育てた経験がないんだ。テレーズとの間に五人もの子をもうけながら、全員孤児院に送り込んでしまい、終生それを後悔し続けるんだね。それとルソーが最も力を入れたのはエミールの青春期の教育だ。なぜなら、ルソーが最も悩んだのは青春期だったからだ。

野口 それは『告白』に明確に書かれていますね。

永杉 『エミール』のはじめの部分は、幼児教育に託して教育の原点をさぐろうとしたところに、その意義がある。その土台の上に、彼は青春期の教育を説いたんだ。

野口 教育の原点といえば、ルソーには有名な「自然に帰れ」という言葉があります。その「自然」とはいったい何なのでしょう。

永杉 この言葉に感激した人が自分のこどもを裸で育てたという話があったが、これは論外だな。まあ、後世の学者の意見のわかれるところでもある。

野口 ルソーは「自然にしたがえ」ともいってますね。

永杉 その「自然」について、彼は「人間の自然」ともいっている。それはいいかえると、「人間の本性」ということだな。

野口 ルソーは「人間は自然的には善である」ともいってますね。

永杉 うん。これはルソーの出発点であり、『エミール』の全編をつらぬいている根本命題なんだが、いわゆる「性善説」の善とは違うな。人間は生まれつき善良にできているというのではない。この「人間」を「私」とおきかえてみるとすぐにわかるね。「私は自然的には善である」と思いたいな。つまりルソーは、人間とはいったい何なのかをつきとめる努力のなかで教育を考えていたんだ。さらに、それをつきとめると「自分」とは何かということだな。

ルソーの説く「自然」について、永杉は「人間の本性」と考えている。また、「人間は自然的には善である」ことについては次節を参照されたい。然しながら、「人間」を「私」に置き換える論理は説得力を有し、永杉において重要である。

3. ルソーの保育・教育思想について

永杉は「エミール私感」の冒頭の一節に「これは『エミール』の解説ではありません。わたくしが長年かかって訳している間に、またそれが本になって読み返している間に、ふと浮かんだことを、わたくしなりに書きしるしたものです」と述べている。^{xiv}

その「エミール私感」は、月刊誌『生活の発見』（生活の発見会発行）^{xv}の1970年（昭和45）10月号から連載されたものであり、『永杉喜輔著作集』第6巻（国土社、1974年）には『生活の発見』1973年（昭和48）11月号までの分が収録されている。その後、その一部は『子どもに学ぶ家庭教育—母親のためのエミール』（柏樹社、1973年）として出版され、さらに『家庭のなかの父親』（国土社、1981年）、『いま「エミール」が生きる—社会と教育』（国土社、1986年）が出されたのであった。

本章は、「エミール私感」から三事例ほど取り上げ、永杉が『エミール』をどのように読み込んできたか示していきたい。

(1) 人間はもともと善なのか^{xvi}

永杉は、『エミール』は本文の最初の書き出しの訳が、いちばん骨が折れた」という。その冒頭の部分について、夥しい訳書や解説書から「おおよそのことをいう」として「『人間は生まれつき善であるが、人間の手にわたると悪になる』という意味の訳が多い」とする。そして、「と

ころがフランス語の原文を読むと、どうも、日本語でいう善悪とはちがう。また、最初の言葉が、日本語で訳すると本の『著者』となる。しかし、著者というと本を作るということに限られるので、私どもはそれを『創造主』と訳した。『造物主』という訳もある。英訳ではGod（神）となっている」「人間や動物や植物。この世のすべてのものを作り出したもの、という意味だろうが、それを神といっても何といっても、とにかく作り出したものがあると想像される。そういう意味で、わたしどもはそれを『創造主』という訳に落ち着いた」と述べる。

次に、「ところで善と悪が問題だ」として、中国の性善説と性悪説について語り、「考えてみると、わたし自身、どっちにも片づかない」として、「人間は善にも向かうし悪にも向かう。悪にしか向かわないとわかっておれば、教育など無意味である。いくら教育しても、どうにもならない人もあるが、それはあきらめるとして、たいていは教育すればなんとか少しでも善に向きそうな気がするのである」と語る。その結果、永杉は共訳者といろいろと協議の上、

創造主の手から出るとき事物はなんでもよくできているのであるが、人間の手にあたると、なんでもだめになってしまう。（永杉訳『エミール』13頁）

という訳にしたのである。その理由について、「同じようなことだが、善と悪という字は使わない方がよいと思ったからだ。人間は善玉にも悪玉にも分けられないから、『よくできている』『だめになってしまう』とぼやかすことにしたのだ」と述べる。さらに、『エミール』のなかの「人間は自然的には善である」という言葉について、「これも、人間は、もともと善良だという意味ではない」として、その「人間」とは何か、という検討を行ない、「人間」を「わたし」と置き換えると、『人間は自然的には善である』の言葉を、『わたしは、もともと善である』としてみると、この『善』は、善悪の善ではなく、『生きていてよろしい』ということ、つまり、自分が生きている、ということは是認されなければならない。『おまえは死ぬ』という権利は誰にもない、というふうに解釈すると落ち着きを感じる」と説明するのである。加えて、「わたしが生きているということは、どうしようもないことで、それを他と比べても、どうにもならぬ。それを、わたしどもは『生命の絶対性』をルソーは主張したと受けとったのである」と記す。

(2) 三つの教育^{xvii}

永杉は、まずルソーの原文を掲げる。

その教育は、自然によって、人間によってまた事物によっておこなわれる。わたしたちの機能や器官の内部的発育は自然の教育である。この発育をどう使うかを教えるのは人間の教育である。そして、わたしたちの五感にふれる物象について自分で経験するのが事物の教育である。（永杉訳『エミール』14頁）

永杉は「ルソーはこの三種の先生から人間はみな教えられているといいます。ですから、この三つがうまく一致しさえすればよいのですが、なかなかそういかないところにむずかしさがあります」と説き起こし、「第一の自然の教育は、これは人間の力ではどうすることもできません。体の発達を遅らせたり早めたりすることはできません。第三の事物による教育も、思うようにまいません。事物の教育は環境の影響といったらわかりやすいのですが、この環境を人間はかつてにつくることはできません。幼児は生まれたとたん周囲の影響を受けます。これが事物の教育です。それを親が、教師がコントロールすることは至難なのです」と述べる。

そして「教育をひとつの技術だとすれば、その成功はまず不可能です。なぜかといいますと、この三つの教育を一致させることは誰にもできないからです。まあ、そう努力してみる以外はありませんが、いくら努力しても運というものがつたいますので、人力の限界があります。そこで結局、どうしても動かせない第一の自然の教育にあと二つを合わせていくよりほかに方法がないということになります」と語る。

さらに「ところで自然の教育といってもわかったようなわからないような気がしますが、たとえば人間の生まれつきの性格、これはどうしようもありません」として、神経質治療の寮^{xviii}にいる方が「寮にいる間は治ったようでも出るとまたぞろ悩みが出るようなものです。寮で悩みがとれたと思うのが間違いで、人間の悩みという、いわば自然の減少をなくそうとするからで、それにしたがってさえおれば、すなおに健康な生活ができるのです。自然だけは人間の力で左右できないとルソーがいうのは、たとえばそういうことなのです」と説く。

また「ひとたび間違った習慣がつくとそういうことになるのでして、自然にそった習慣なら、習慣を自然だとよんでもよいのです。人間はまず感覚的なものとして生まれます。子どもははじめ快、不快によって動き、だんだんと事物（環境）にそって動くようになり、最後に理性によって与えられた幸福あるいは完全と言う観念にもとづいて判断し、その結果によって求めたり避けたりするようになるのです」、「この自然な発達がまちがった習慣によってゆがめられがちなのです。そのゆがめられる以前の傾向をルソーは『自然』と呼ぶのです。ですから、すべてのものを、この本来の傾向に帰一させることができたなら、それこそ理想的な教育なのですが、それは何も遠いところにそれがあるのではなく、ただ今、足下にあるのです。道は近きにありということは、自分にあるものを自覚せよということで、それがそのまま『悟り』ということで、別に悟りがあるわけではない。迷いそのものが悟りとわかったとき、三種の教育は一つになっているのです」と説くことにより、永杉独自の境地を開陳する。^{xix}

(3) 大人が無理に教え込むのは良くない^{xx}

まず永杉が引用したルソーの原文を掲げる。^{xxi}

子どもが何もいわずにいっしょうけんめい手をのばしているときは、距離がわからないので、

者に手がとどくと思っているのである。思い違いをしているのだ。だが、かれが手をのばしながら泣いて訴えるときは、もはや距離を勘違いしているのではない。近づいてこいと物に命令しているか、それを持ってこいとあなた方に命令しているかどうかである。第一の場合には、子どもを物の方へ、ゆっくりと少しずつつれて行ってやるがよい。第二の場合には、聞こえないふりだけしておればよい。泣けば泣くほど、聞いてやってはならない。早くから人にも物にも命令しないようにしつけることが大切である。

なぜならかれは人の主人でもないし、また、物にはかれのということがわかるわけではないからだ。このように、子どもが何かを見てほしがるとき、そしてそれをかれに与えてやろうと思うときは、子どものところにその物を持って行ってやるより、子どもを物の方へつれて行ってやる方がよい。この実地の経験から、子どもは年相応の結論を引き出すのである。そして、ほかには、こどもにそれを知らせる方法はないのだ。

ここから、永杉は二つの事例を引き出す。「子どもが物をほしがるとすぐそれをとってやる親は子どもに距離感の生じることをさまたげていることになるのです。そうすることが度重なると、子どもは自分のほしいものはなんでもすぐに手にはいると思うようになり、それが手に入らないと泣き叫ぶのです。すると親は根負けしてとうとうそれをとってやるというようなことをくりかえしていますと」、「また、小さい子が柱にぶつかって泣くと、親は『この柱が悪い』と柱をたたいてみせるので、子どもも泣きながらたたきます。柱は動いてくれないので。それにぶつかったほうが悪いのです、柱があったら、それをよけて通ることを教えないければならないのに、その逆を教える。だから、自分をさまたげるものはすべて悪いと思うようになり」、そうして育てられた子どもは成長してからも何でも自分の思う通りになると思い込んでしまうと説くのである。

ここで永杉の保育・教育思想を紐解くと、「人生は思うようにならない」という考えがあり、「人生は思うようにならないものであればこそ、自分で真剣に考え、判断し、実行する力が養われていくことを強調する」のである。^{xxii}

おわりに

本稿は、永杉喜輔、宮本文好、押村襄共訳『エミール』を用いることにより、ルソーの保育論・教育論に言及するだけではなく、翻訳の中心となった永杉が『エミール』をどのように読み込んだか、ということを明らかにすることにより、永杉の教育思想の解明を深める意図をも組み込んだきた。

ただ、このたびは永杉がルソーと同様に大きな影響を受けた下村湖人には言及できなかった。即ち、永杉がルソーの書物から学んだことを、下村湖人の言動から学んだことどもを、自らの内においてどのように咀嚼してきたか、その事例を検討すること、またルソーの保育・教育思想の

事例を積みかさねていくことを次稿以降の課題とすることを明言して擲筆する。

(のぐち しゅういち・高崎経済大学非常勤講師)

- i 例えば、山口拓夢『『エミール』の教育思想』（『札幌大学女子短期大学部紀要』第65巻、札幌大学女子短期大学部、2018年）を参照。
- ii 坂倉裕治「日本における『エミール』の初訳—菅學應の抄訳（1897年）を読む—」（『立教大学教育学科研究年報』第56巻、2013年）参照。
- iii 野口周一『永杉喜輔の教育思想—下村湖人・ルソーとともに—』（世音社、2018年）参照。
- iv 「『エミール』と『次郎物語』」という表題のもと、「1. 教育とは言葉ではない」、「2. 『自然に帰れ』とは」、「3. テレビを消しなさい」、「4. エミールと次郎」という展開で、永杉のルソーについての理解をまとめたことがある（野口周一『生きる力をはぐくむ—永杉喜輔の教育哲学—』所収、開文社出版、2003年）。
- v 註iiiに挙げた『永杉喜輔の教育思想』に収録された第一論文「永杉喜輔論」はそれに応えるためのものであった。その初出は高崎経済大学附属産業研究所編『群馬・地域文化の諸相』（日本経済評論社、1992年）に収録されている。加えて私見を述べると、『エミール』の刊行は1762年であり「教育の古典」と称されてきた。一方『次郎物語』第一部は1941年（昭和16）のことであり、「次郎」と冠された名称に邪魔をされ、群馬大学の卒業生のなかには「永杉はまだ次郎物語を卒業できないのか」と囁く、永杉の講義を理解しえない諸氏も存在するのである。
- vi 岡本重慶「社会教育と森田療法の合流—下村湖人らの「新風土」から水谷啓二の「生活の発見」へ—」（『生活の発見』2019年4月号〈通巻708号〉、生活の発見会）。
- vii 一例を挙げる。「『世界は一つ、の大会を終わって』と題して、「東京オリンピックは予想以上の成功であった」「東京オリンピックは戦後の退廃的気分を一挙に払いのけるだけの効果をあげたと思う」と記し、「その効果の一つは、戦後に育つ若者はみごとに育っている事実をまざまざと見せられたことである。『青年対策』などといった大人たちは恥ずべきである。対策とはなにごとかと青少年たちは怒っているにちがいない。長ったらしいいい方だが、日本にほしいのは『青少年育成政策』である」と述べる（『毎日新聞』昭和37年10月25日付、『永杉喜輔著作集』第10巻所収、国土社、1975年、56—58頁）。
- viii 語句の言い換えについて、筆者の知人（社会福祉学）は「障害や障碍を『障がい』と言い換えて、すべて解決した気になっている輩がいる」と論難している。
- ix 『煙仲間』1988年8月号、『凡人の道—煙仲間のこころ—』所収（漢声社、1998年）85—86頁。
- x 前掲『生きる力をはぐくむ』243—245頁。
- xi 永杉喜輔『生涯教育自分史の試み』（小林出版、1989年）35頁。小金井の青年団講習所については、植原孝行氏が下村湖人著『杜の協同生活記』の校訂本を作成された（『杜の協同生活記』私家版、2018年）ので、それを参照するのが良い。植原氏は群馬大学における社会教育主事養成課程における担当授業のなかで、学生の便に供するためもあり、さらには底本とした『下村湖人全集』第6巻（国土社、1975年）の誤植を正したのであった。植原氏がこの挙に及んだのは、同書から深い学びを得たことの証左であり、感嘆すべき快挙である。なお永杉がいう「小学校出」については誤解を招く恐れがあるので解説を付すことにしたい。湖人は「中等学校卒業程度の学力を有し」、「尤も、学力は実際に中等学校を卒業している必要はなく」と記している（前掲『下村湖人全集』第6巻、76頁）。植原氏は「当時、中等学校の卒業者は地域社会のエリートでした」と述べる（植原私家版、(2)頁）。永杉はこの講習に参加しているのであり、なぜ「小学校出」と記したかは不明である。
- xii 前掲『生きる力をはぐくむ』245—247頁。
- xiii 前掲『生きる力をはぐくむ』247—249頁。
- xiv 『永杉喜輔著作集』第6巻、12頁。
- xv 『生活の発見』は、1957年（昭和32）に水谷啓二、永杉喜輔、斉藤光人、長谷川洋三の4人を編集委員として創刊された。水谷はかつて神経症に苦しみ、それを森田正馬に救われたことがある。今や森田の名は森田療法として世界的に有名である。森田は自宅に患者を寄宿させ、家庭的な雰囲気の中で日常生活を通して指導したのであった。水谷は森田に倣い、1959年（昭和34）に自宅を開放して「啓心寮」を開設、神経症に悩む人々たちを入寮させたのであった（前掲『永杉喜輔の教育思想』88—89頁）。
- xvi この項目は、『いま「エミール」が生きる』17—21頁に拠る。
- xvii 『永杉喜輔著作集』第6巻、30—32頁。
- xviii 啓心寮のこと。
- xix 「永杉喜輔論」（前掲『永杉喜輔の教育思想』所収）参照。
- xx 『永杉喜輔著作集』第6巻、53—55頁。
- xxi 永杉は『エミール』を必ずしも訳文に忠実に引用しているわけではない。読者の便に供するために、さらに意識していることが分かる。永杉訳『エミール』47頁参照。
- xxii 前掲『永杉喜輔の教育思想』112—113頁。